

「いじめ」の対策転換と統治性の変容

——文部科学省によるいじめ定義の改訂の考察——

京都大学 姚逸葦 (YAO Yiwei)

一、 背景

現在の日本社会において、学校におけるいじめ行為という現象は喫緊な社会問題として認識されている。いじめ問題に対処するため、文部科学省は 1986 年に初めて「いじめ」を明確に定義づけるとともに、一連の対策に乗り出した。しかし、文科省によるいじめの定義は、この 30 年の間に 2 度改訂され、最初の構成要素はほとんど取り替えられることになった。つまり、多くの資源を費やしていじめ対策が進められてきた一方で、その根幹をなすいじめの定義は 2 度の改訂の中でまったく別物にすり替えられてしまったのである。本研究は、いじめの定義改訂をもたらした要因を究明することを目指す。

二、 目的と戦略

考察の際に、本研究は Wittgenstein の言語論 ((Wittgenstein 2003=2013)、とりわけ彼が提示した「家族的類似」(family resemblance) の考え方に従い、いじめの定義を対策の目標や方針に基づいて創られたものと想定する。その上で、いじめ行為の特徴の変化という内的要因より、概念そのものの使用目的および形式の変化に注目する。定義の変化を理解するために、本研究はいじめ対策の制定者である文部科学省に絞り、いじめ対策の方針を記述する公的文書を考察対象にし、それぞれの時期に採用されたいじめ対策のテクノロジー、およびその背後にある日本社会の管理や統治の技術の転換を重要な手がかりとする。

そのため、本研究の目的は、「いじめ」という概念の主な制定者と使用者である文科省の使用目的の変化に対する考察を通じ、いじめ定義の要素の「すり替えられ」という現象の原因を解明する。さらに、いじめ定義の改訂を糸口にし、この 30 年間ににおけるいじめ対策の変化を追うことで、フーコーの統治術論 (Foucault 2004=2008) を援用し、学校空間における生徒管理のテクノロジー転換、およびその背後にある、日本社会の管理技術の転換についても考察する。

三、 結論

文科省のいじめ認識と対策に関する公的な文書を分析することを通じ、いじめ認識と対策の 2 回の大きな転換は、いじめ定義の要素の「すり替えられ」を招いた原因であるということが解明された。さらに、1980 年代以降、文科省に採用されたいじめ対策の方針は、「身体の訓練」、「心の訓練」、「環境管理」という 3 つの時期に区分することができる。その 3 つの時期の対策方針は、それぞれ「管理主義」、「ゆとり教育」、「脱ゆとり教育」3 つの時期の教育政策の理念、および各時代の日本の社会管理の技術を色濃く反映したものであるということも明らかになった。

四、 文献

Foucault, Michel, 2004, *Naissance de la Biopolitique: Cours au Collège de France 1978-1979*, Paris: Seuil/Gallimard. (= 2008, 慎改康之訳, 『生政治の誕生: コレージュ・ド・フランス講義 一九七八—七九年度』筑摩書房).

Wittgenstein, Ludwig, 2003, *Philosophische Untersuchungen*, Suhrkamp Verlag Frankfurt am Main. (= 2013, 丘沢静也訳, 『哲学探究』岩波書店).

五、 謝辞

本研究は JSPS 研究費 16J10962 の助成を受けたものです。